

ひまわりからの メッセージ

96号

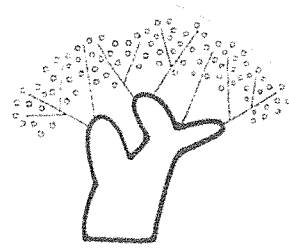
2019.6.10.

NPO ひまわりの花内
西濃園城

発達障がい支援センター

発行人：中野たみ子

時を刻む



今年、庭の隅で時計草が咲きました。十何年も前に、鉢植えでいただいたのですが、おっと花を見ることはなく、もう枯れてしまったのだと思っていました。植垣にからみついて、五輪も花をつけているのを見て、植物の強さを今更ながら知らされた思いでした。

ところで、世は「働き方改革」の時代ですね。時の記念日を前に、私には思い出されることがあります。

もう、何十年前になるでしょうか。大学を卒業し、当時唯一の国立施設だった秩父学園というところに勤務した時のことです。埼玉県所沢市に今も在りますが、当時の学園には、全国各地から知的に発達障害をもつ子どもたちが入所していました。

そこで、職員として徹底的に叩き込まれたのは、時間の有効な使い方でした。

私の担当は女児の寮で、入口に大きなホールがあり、ホールから奥に向かって中央に廊下があり、廊下の左右には子どもたちの居室、事務室、トイレなどが並び、廊下の突き当たりにも居室がありました。

まず出勤したら、自分が奥の居室に行くまでに、何と何と何を奥の部屋へ行き、そこで何をして、戻ってくるまでに何と何を戻るという手順をきちんと計画的に頭いたたき込んで仕事をこなすのです。Aの部屋に行くと、ホールに戻り、Bの部屋でやり忘れたのでBまで戻ると……等という行動の無駄は許されません。子どもたちと過ごす時間を大切にするためには、どのように雑事をこなすかということですが、常に先を見通しつつ仕事をししていくという当時の経験は今も私の中に生きつづけています。

人生一〇〇年時代だそうですが、時間の使い方は人それぞれです。どんな時間の使い方が良いのか、一概には言えません。自分にとって限りある時間をどの様に使うかは、人生の豊かさに関わることでもあるのでしょうか。外は雨です。梅雨入りをテレビが報じています。

最近の思い

あれこれ……



皆さんは、お元気ですか？

毎日、暑い日があると思えば肌寒く感じる日もあって、何となく体調が……という方も多いのではないだろうか。

私もこの所、考えさせられることが多く、西濃圏域発達障がい支援センターの十年をふり返ってみています。この通信

「ひまわりからのメッセージ」もずいぶん長く書いてきました。

でも、何度も何度も書きつづけ、言い続けてきたことが、まだまだ十分ではないことを思い知らされてもいます。

幼児期の気づきの大切さ

ある園に伺った時のことです。「気になる子がいるので、見てもらえますか。」と言われて、クラスに伺いました。保育士さんは「あの子とあの子なんですが……」とおっしゃいます。なるほど、発達がゆっくりで知的能力の弱さのあるお子さんたちです。でも、そのまわりに、集団活動がとり難い子や、一人あそびに没頭している子など、私にとって気になる子が三、四人いるのです。「先生、あの子たちは？」「ああ、別に、分かっている子なので……」。いいえ、一人は多動もあるし、もう一人は

コミュニケーションの苦辛があるでしょうか？、お子さんたちの特性に気づいていらっしやうないことに、私は正直、おどろいたのです。保育士にとって手がからない子であれば、本人の困りに気づけないということは、どういうことでしょうか。私は、十年前にタイムスリップしたのでしょいか……。

幼児期の気づきというのは、何も、その児が障害があると一言しているのではないのです。その児の育て方を、お父さん、お母さんと一緒に考えていくことが必要だと一言しているのです。そのためには、保育者の質が問われます。

幼児期の気づきとして次のようなことに留意しましょう。

・表情の乏しさ、

・共感することの乏しさ、

(大人が指さした物を一緒に見たり、「これで良い？」と承諾を得るような見返りをしないなど)

・興味の限局

ことばの遅れは見られなくても、人と共感し、一緒に喜んだりすることや、遊べることは、いいと思います。もちろん、遊び方や保育者にとって手がかかる子が問題なのではなく、子どもたちの発達上の困りに早く気づいて、支援を始めることができるかどうか、それが保育者の専門性ではないでしょうか。

「ぼくはダメな子なんだ！」

「ちんちんとやろうとしても出来ない！」



小学生の中には、こう言う子が少なからずいます。その子を観ていると、体のどこかが動いています。「落ち着きがないんです」「何度言ってもダメなんです」「私の育て方が悪いからだと責められます」。お母さん方の多くは、辛い思いをし、育て方の難しさを訴えられます。

この通信に何度も書いてきましたが、

「特性」なのか、「反応」なのかの見極めが大切です。

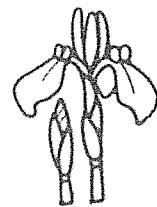
多動症のお子さんは、きちんと座ろうと思っても、自分の意思でその動きを止めることはできないのです。それなのに叱りつけて、先生がおられます。その結果、二次障害を引き起こす子どもたちが少なからず存在します。反応として現われてくるのが、反抗としてますます行動がひどくなるか、あるいは、自己否定です。

ADHDは、脳の神経伝達物質が原因であると言われていますが、脳の成熟に伴って高学年になる頃には少しづつ落ちついてくるものです。高学年になっても、ますますキがつけられない状況になっているとしたら、今までの対応のまますぐに二次的な障害になってしまったのだと考えられるのです。

発達障害と一言で片づけることはできません。一人ひとり違うからです。けれども子どもの特性を知り、「想定内」のことなのかどうか、見極める目が、保育者や教育者には必要不可欠だと私は考えています。

場面緘黙??

どうしても話をさせてみせるぞ!!



まさか、今の世にこんなことを堂々とおっしゃる担任はいないと思うのですが、ことばを話すことを苦手とする子どもたちは少なくありません。家で話せるなら学校でも話せるはずだと思われませんか? 家を一歩出たら緊張してしまいう子どもたちにとって、話すことを強要されることは、おそろしく拷問と同じでしょう。私はよく「北風と太陽」の話を思い出すのですが、話せない子に必要なのは、話を聞かなくてはならない場を作って強要することよりも、自ら話したいと思えるような場を作り出してあげることなのではないでしょうか。その子の好きなこと、好きなもの、興味のあることを知り、その気持ちに寄り添う気持ちがあるのかどうか。スタートは、まずそこではないでしょうか。話すということだけがコミュニケーションの手段ではありませんから、子どもを追い込むことはしたくないものです。

相談の難しナ

「私は、どうしたらいいですか？」

私は、多くの相談を受けるのですが、最近、難しさを感ずる事が多くなっています。お子さんが小さい頃からずっと話をしてくれている方だと、何年もの間隔があっても物事の核心にふれて話す事ができます。けれど、その人の育った背景も今までの対応もわからずに相談を受けると、難しいなあと思うことが度々です。

「中学生になった息子がゲームばかりやっていて困る、どうしたらいいでしょう。」という相談があっても、今までずっとゲームを容認してきた結果であれば、私が今更何を言っても無駄でしょう。「特別支援学校も考えています。」と口では言いながら、成績ばかりを気にして、お子さんの特性理解ができていないお母さんには、まだまだ長い時間が必要でしょう。

「みんなが私を見て笑っているんです。」という相談もありました。子どもたちの中にも明らかに被害妄想的なことの相談もあります。「それは気のせいです。」と言っても本人がそういうふうに感じているのですから、まずは寄り添うしかないという時もあります。

中でも一番困るのは、「私はどうしたらいいですか？」という質問です。お母さんや先生方に多い質問ですが、今までどうしてきたのか、自分としてはこう考えてやってきたけれど行き詰まっているという事であれば、まだ一緒に考えることもできるのですが、こういう質問をされる方の多くは、ただ聞いてみるだけという事が多いように思います。そして、色々な方に聞いてみて、自分に都合の良いことをやってみるか、又はやらなのまま、上手くできないと「〇〇に相談したけどダメだった。」と、おっしゃる事が多いように思います。

相談を受けた時、相談者が自分で解決策を見い出していけるようにしていきたいと日々思っているのですが、ついつい「くしてみたら？」と、自分の考えを前面に出してしまいがちなことを反省しています。「相談してみても良かった。」と思えるのは、おそろしく自分で方向性を見い出せた時だろうと思います。相談を受ける側の人間として、まだまだ修業が足りないと言わざるを得ないのです。どこまで続く道でしょうか……。一緒に考えていくしかありませんね。

お知らせ

・七月親の会は八日、中川ふれあいセンターにて。